

平成 29 年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名	筑波大学
-----	------

I 概要

1 事業の概要

筑波大学附属の 11 校（以下「筑波大学附属学校群」という。）は、心のバリアフリーにつながる多彩な教育プログラムを実践的に開発するため、以下の二つの事業に取り組んだ。

①附属大塚を拠点としたスポーツ及び文化・芸術活動を含む系統的発展的な交流学习プログラムの開発

（スポーツ）

参加者に合わせてルールや道具に工夫や変化を加えたスポーツ（以下、アダプテッドスポーツ）の持つ特性に着目し、全学部における交流会で緊張ほぐしの導入や交流会の活動内容にアダプテッドスポーツを活用した活動を盛り込んだ。また、年間を通じた交流を実施することで、障害のある児童生徒と、障害のない児童生徒が対等の立場で理解し、尊敬し合える関係になるためのコンテンツや交流プログラム、アダプテッドスポーツの種目を開発した。

（文化・芸術）

「スポーツと文化の融合」「多文化理解、国際理解」の観点にたち、文化・芸術的な活動を通じたモデルの交流プログラムや、障害のある方々と障害のない方々が協働した活動について発信することを試みた。

②筑波大学附属学校群が異年齢・多障害で取り組むバリアフリー交流プログラムの開発

（スポーツ）

黒姫高原共同生活では、野外活動を中心とする共同生活を、共生シンポジウムでは、スポーツ交流とパラリンピアンによる講演を実施した。黒姫高原共同生活では、児童生徒の参加回数が増えるにつれ、障害のある人への支援により積極的になれること等が明らかになるとともに、両事業で児童生徒の主体的な取組に進展が見られた。

（文化・芸術）

黒姫高原共同生活では制作・鑑賞活動、共生シンポジウムでは黒姫高原共同生活や海外留学経験に基づくシンポジウムを実施した。制作・鑑賞活動及びシンポジウムなどの活動内容や活動形態が、障害理解を含む相互理解に与える影響を一定程度整理することができた。

2 事業の成果

①附属大塚を拠点としたスポーツ及び文化・芸術活動を含む系統的発展的な交流学习プログラムの開発

昨年まで実績を積み重ねてきた「スポーツ・身体活動」に加え、新たに「芸術・文化的な活動」も取り入れて、幼・少・中・高、全ての学部で交流及び共同学習に取り組んだ。

（スポーツ）

	交流相手	概要	成果など
幼稚部	固定	大塚の授業で行っていることと同じ内容を一緒に行う。	・自信を持って取り組むことができた。 ・副次的に籍を置いた園と交流を行うことの効果。

小学部	多様な年代 ・小学生 ・高校生 ・大学生	・野外活動 ・提供された活動の体験 ・共同制作	・それぞれの相手と、お互い、楽しむことができた。(積み重ね交流、単発の交流) ・障害のある人への様々な気づきを与えるきっかけになっていた。
中学部	固定した相手からの広がり	・スポーツ体験 ・合同合奏 ・給食交流、授業体験	・アイスブレイクとしてのスポーツ体験効果の実感。
高等部	・附属坂戸高校生(のべ5回) ・筑波大学生 ・アスリート	・スポーツを通じた交流 ・芸術鑑賞と体験	・スポーツ開発を通じた様々な気づき(相手の立場に立った考えなど)。

(文化・芸術)

	交流相手	概要	成果など
中学部	固定した相手からの広がり	・合同合奏	・交流の広がり(ダンス部との関わり、文化祭での作業製品販売、ステージ発表参観者からの賞賛など)。
高等部	・附属坂戸高校生(のべ5回) ・芸術家	・芸術鑑賞と体験	・感動を共有することで交流相手との一体感が高まる。 ・文化活動の効果の実感。

(共通)

○相互理解を深めることができる交流手段(手立て)の蓄積

幼稚部が交流手段に「学校で行っている授業と同じ内容」を用いたこと、小学部は交流学習の発表に運動会で行ったダンスを用いたこと、中学部は音楽の授業で行っていること、高等部は年間指導計画の中で計画的に取り組んだ総合的な学習の成果発表や、アダプテッドスポーツの発表を行ったことなど、「交流会のための特別な準備」をなるべく行わないことで、負担が生じない計画を立てて取り組むことができた。

○交流及び共同学習を活性化する専門家の活用

交流校の教員以外に専門家(交流相手である場合もある)と連携・協力を行うことで、学校教員だけでは実現が難しい交流及び共同学習の実現が可能となり、また、実際の活動を効果的に進め、活性化することができた。今年度、大塚特別支援学校では以下に記す交流において、外部専門家と連携して実施することができた。

②筑波大学附属学校群が異年齢・多障害で取り組むバリアフリー交流プログラムの開発(スポーツ)

野外活動を中心とした黒姫高原共同生活は、本年で3年目であるが、回を重ねるごとに参加希望者が増え、児童生徒の主体性と交流の質が高まっている。障害のある人もない人も一緒に活動できること、多様さは楽しさや豊かさにつながるといった認識が深まっていると考える。

共生シンポジウムも、3度目の実施であるが、スポーツ交流を取り入れて2年目である。事後のアンケートでは、9割を超える参加者(但しアンケート回答者)が共生社会に対する意識の変化について肯定的な影響を与えたと回答した。

(文化・芸術)

班別のアイスクリームづくりは、速くおいしく作るために班のメンバーがたくさんのコミュニケーションをすることとなった。個別の制作活動である思い出の作品作りは、参加者それぞれの個性が発揮され、多様な人々の存在を実感させる機会となった。

(共通)

児童生徒のアンケート調査では、経験のある人の方がいない人よりも、より一層支援を積極的に行えると思うことが明らかとなった。また、障害のある児童生徒同士の交流の深まりや児童生徒の主体的な取組の進展が見られた。さらに、3年間の取組を通じて、障害の有無、学校段階ごとに身に付けさせたい力を整理した。

3 事業の課題とその解決のために必要な取組

①附属大塚を拠点としたスポーツ及び文化・芸術活動を含む系統的発展的な交流学习プログラムの開発

(スポーツ)

重複障害のある生徒や、自由な動きが難しい生徒でも実施可能な種目、高齢者施設などの狭い室内でも実施可能な種目を考案する必要がある。

(文化・芸術)

引き続き実践を積み重ねることで交流場面での合理的配慮などについて知見を積み重ねる必要がある。また、題材とともに、手立てに関しても、様々な試みを行っていききたい。

(共通)

○「交流及び共同学習」の客観的な評価方法、分析方法の検討

交流内容と実施回数、障害のある方との交流経験や障害に対する知識、障害理解の授業経験の有無などが、障害のある方への意識や障害理解の程度にどのように影響するのか、知見を得ていく必要がある。また、障害のある児童生徒へのアンケート調査は、質問項目への理解が回答内容に影響を与えやすいと考えられるため、補完する別の分析方法を見出していく必要がある。

○共通した評価の指標、評価方法をもつこと

幼稚部から高等部まで含めた学校全体の交流及び共同学習のねらいや評価の指標について整理する必要がある。知的障害のある幼児児童生徒に関しては、「他者理解の深まり」及び「自己理解の深まり」を中心に評価を行っていく。

②筑波大学附属学校群が異年齢・多障害で取り組むバリアフリー交流プログラムの開発

(スポーツ)

○持続可能な共同生活型交流の検討

これまで3年間、黒姫高原において実施してきた野外活動を中心とした共同生活型交流については持続可能性、更なる交流の拡大という観点から実施場所を検討する必要がある。平成31年度以降の予定開催地で試行を行うとともに新たなスポーツを検討していきたい。

(文化・芸術)

○効果的な制作・鑑賞活動の開発

制作・鑑賞活動の内容や実施形態が障害理解等に影響を与えることが整理されてきた。継続して影響や効果を確認めるとともに、有効な活動内容等を開発する必要がある。

(共通)

○学内における理解・啓発の推進

成果の学内への普及啓発を図る必要がある。そのために、附属学校群の全児童生徒を対象に附属学校群が行う交流及び共同学習や各学校が行う交流及び共同学習に関する広報を行い、日常的な障害理解の促進を図る。

○評価の工夫・開発

効果測定や意識調査を多面的な観点から行う必要がある。